

けることができるようにすることをねらいとしている。それは、低学年の子供の実態として次のようなことによる。

- 子供は、自分の発想で「してみる」という視野の中にしか問題を見いださない。
- 子供は、積極的に「しよう」という過程の中にしか問題をもたない。
- 子供は、ねらいをもたないと問題を意識しにくい。

子供は、「しよう」と思っているねらいに向かうところに「はばまれる」という抵抗が生じると、そこに「なぜだろう。」「どうして。」と問いが生まれ、「こうしたら解決できるのではないか。」と問いかけが始まり、自分なりに切り開いていこうとする。これが「自ら問いかけ、解決していく力」となる。

すなわち、問題を解決する問いは、他からの問いではなく、自分自身が解決したいとする、子供の内的欲求から生まれてくるものである。そこで自ら問いかける子供の姿は、主体的かつ意欲的な姿である。自らの問いに対して「こうすれば。」「こうかもしれない。」といった、自分なりの発想による小さな解決から進んでいくと、つまずきに出会う。教師の支援等によりこのつまずきを克服すると、さらに新たな問いが生まれる。この繰り返しによって問題を解決する力が育つと考える。

しかし、問題をもち、解決していくときに、その発端が大切となる。「まず、自分でしてみる。」「思うようにいかない。どうしてかな。」と、子供自身に疑問が芽生えるようなものでなければならぬ。そのためには、子供が「してみよう。」「やりたいな。」と思うようになる活動のきっかけをつかめるようにすることが大事である。一人一人の子供が、興味・関心を寄せ、自分なりの思いを寄せる活動のきっかけは、学習の場とのかかわりが大きい。

生活科は、子供の生活圏すべてが活動の場である。子供が作ったり、遊んだりするような様様な活動を促すもとは、作りたい、遊びたいと自ら要求するような場に出会うことである。したがって、子供が夢中になって取り組むことのできる環境構成や環境作りが重要になってくる。

また、子供のつまずきに対する教師の支援の仕方も、「自ら問いかけ、解決していく力」を育てるうえで重要である。一人一人の子供が、自分で問題を解決しようと試行錯誤しながら活動するのを見守り、子供が自らすることを認め、励ましていく支援が求められる。しかし、自ら解決することをねらうあまりに、待ち過ぎて子供の手之余り意欲をそこなわせたり、引き出すことが少なかったりすると、解決の成就感が乏しく、新たな問いが生まれず、中途半端な活動に終わってしまう。つまずきの度合いによって支援の仕方を変えていく必要がある。

子供にとって、問題が本当に自分のものになっているときは、今までの自分の経験をもとにいろいろと解決の方法を考え、試みるものである。子供が自分の力で問題を見だし、「こうしてみよう。」「ああしてみよう。」と、自らの力で発想し、考える習慣を身に付けることが、これからの社会の変化にたくましく対応し、生きて働く自己教育力につながるのである。

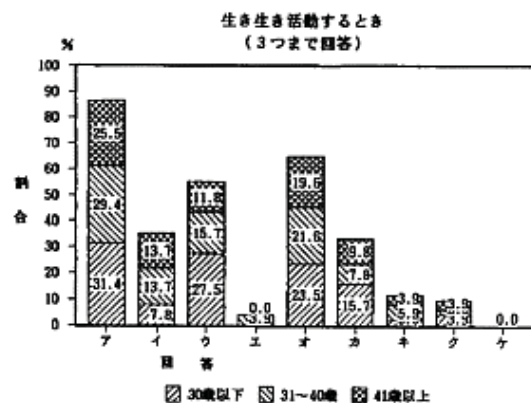
2 研究主題にかかわる意識・実態調査

研究主題の基本的な考え方にに基づき、生活科指導上の諸問題などの実態を調査・把握するため、県内小学校生活科担当教員8校51人を対象に、平成5年1月8日から1月18日までの期間でアンケート調査を実施した。

(1) 活動状況に関すること

質問1
生活科の授業で、子供が特に生き生きと活動しているのはどんな時だと思いますか。該当するものを選び、その記号を回答欄に記入してください。(3つまで回答可)

| 選 択 肢 | 回答率 (%) |
|----------------------------|---------|
| ア 活動内容に興味・関心があるとき | 86.3 |
| イ 活動の中に感動や気付きがあったとき | 35.3 |
| ウ 自分の思いやねがいが生かせる場があるとき | 54.9 |
| エ 自分なりのめあてが見つけれられたとき | 3.9 |
| オ 五感や体全体を活発に駆使して活動しているとき | 64.7 |
| カ 自分の考えや活動が認められたとき | 33.3 |
| キ 未知の体験に取り組んでいるとき | 11.8 |
| ク 自分のよさや成長に気付き、活動に自信が見えるとき | 9.8 |
| ケ その他 | 0.0 |

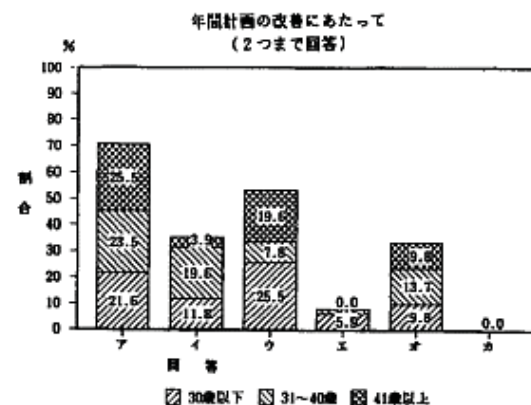


五感や体全体を使って活動でき、その中に自分の思いや願いが生かせる場があるということが子供が生き生きと活動できるために大切であると考えている教師が多い。「自分なりのめあてが見つけれられたとき」「自分のよさや成長に気付き、活動に自信が見えるとき」が低いのは、子供の内面的なものが活動として現れにくく、とらえにくいためであろう。「自分のよさや成長に気付き……」という項目は、生活科のねらいである自立への基礎を養うために「子供が集団の中での自分の在り方や友達との違い、自分のよさや取り柄などに気付き、それを生かしてよりよく生活できるようになること」と深いかわりがあるが、この点についての教師の意識は薄いようである。

(2) 指導計画の改善に関すること

質問2
自校の年間計画を改善する際に、あなたが特に配置したいことは何ですか。次のア～カの中から該当するものを2つ選び、記号を回答欄に記入してください。

| 選 択 肢 | 回答率 (%) |
|-----------------------------------------|---------|
| ア 地域の様子を十分に調査し、子供の実態に合わせながら自校の独自性を出したい。 | 70.6 |
| イ 子供の体験や活動が、継続していくような単元を構成したい。 | 35.3 |
| ウ 子供の関心・意欲を高める多様な活動や体験のできる素材や場を選択したい。 | 52.9 |
| エ 他の教科・領域や他学年との関連を明確にしたい。 | 7.8 |
| オ 生活科の目標や内容を分析し、評価計画を組み入れたい。 | 33.3 |
| カ その他 | 0.0 |

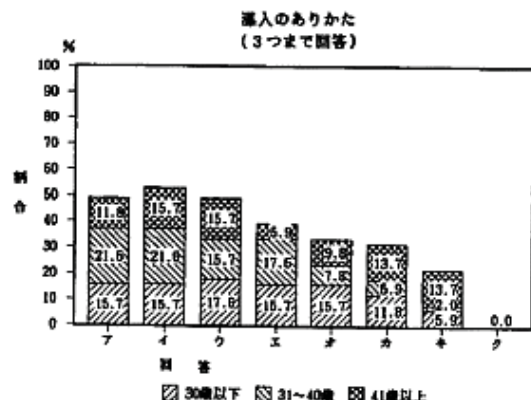


昨年度、年間指導計画及び単元指導計画を作成してスタートした生活科であるが、作成する段階で、先進校の例や実践事例集を参考にしたものが多いようである。しかし、1年近く生活科の授業を実践してきて、生き生きとした子供の様子や他の教科では見られなかった子供の様子を実感としてとらえていく中で、この教科のもつ魅力に気付いてきたのではなかろうか。これが、アの「自校の独自性を出したい。」の70.6%及びウの「子供の関心・意欲を高める素材や場を選択したい。」の52.9%の結果に表れている。

(3) 授業の導入の在り方に関すること

質問3
子供の活動への関心・意欲を高めるための導入の在り方として、特にどのようなことに留意していますか。該当するものを選び、その記号を回答欄に記入してください。(3つまで回答可)

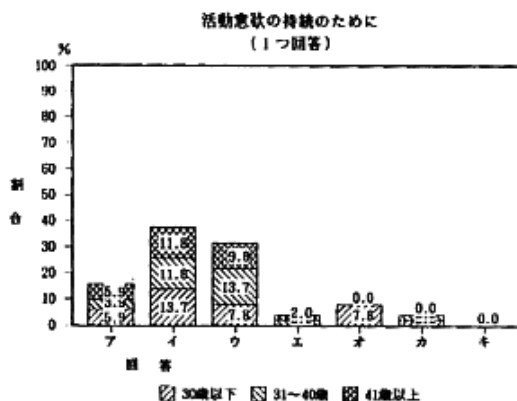
| 選 択 肢 | 回答率 (%) |
|------------------------------------------------|---------|
| ア 子供の関心に応じて、教師が学習素材の選択をしている。 | 49.0 |
| イ 子供の関心に応じて、子供に活動の自己選択の場を設定している。 | 52.9 |
| ウ 子供が関心をもつような学習の環境構成を工夫している。 | 49.0 |
| エ 子供の関心を高める問いかけをしている。 | 39.2 |
| オ 子供の日常の日記やつづきを取り上げ、活動の契機としている。 | 33.3 |
| カ 子供の思いを生み出す体験活動を学習の契機としている。 | 31.4 |
| キ 活動の連続性を大切にし、前単元の終末部分からの子供の意識が喚起できるように工夫している。 | 21.6 |
| ク その他 | 0.0 |



設問項目すべてにわたって回答されている。「自己選択の場」を設定しているという回答が52.9%と多いが、これは子供の自己決定の場を大切に、関心・意欲の喚起を図っているためであると思われる。しかし、活動の連続性を大切に、前単元の終末から子供の意識をつないでいるとする項目の回答数が少ない。これは、各学校の年間指導計画の中で、個々の単元が独立して構成されているように思える。子供の意識の流れを大切に、大きな枠の中でとらえ、単元の統合を図っていくことの必要性を感じる。

(4) 活動意欲に関すること

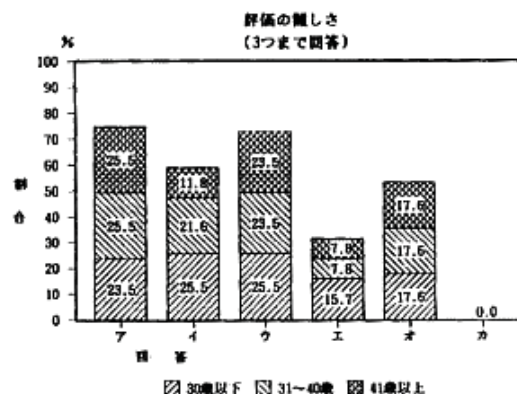
| 質問4 単元を通して子供の活動意欲が持続するために、特にどのようなことに留意して指導すべきだと思いますか。該当するものを1つ選び、その記号を回答欄に記入してください。 | | |
|----------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|---------|
| 選 択 肢 | | 回答率 (%) |
| ア | 子供の関心に応じた学習素材の選択をする。 | 15.7 |
| イ | 一人一人の思いや願いを大切に活動の場づくりに心がける。 | 37.3 |
| ウ | 子供の意識に沿い、自分で選択・工夫できるような活動の流れを構成する。 | 31.4 |
| エ | 表現活動を適時に位置づける。 | 3.9 |
| オ | 一人一人の気付きを大切に、認めるように心がける。 | 7.8 |
| カ | 自己を振り返る活動を工夫する。 | 3.9 |
| キ | その他 | 0.0 |



イとウの項目が30%を越えている。これは、多くの教師が生活科の趣旨を十分に踏まえ、生活科の授業を実践する上で、子供の思いや願いを最も重視していることの表れである。

(5) 評価に関すること

| 質問5 生活科の授業を実践していて、評価に関して、特に難しいと感じていることはどんなことですか。該当するものを選び、その記号を回答欄に記入してください。(3つまで回答可) | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------|---------|
| 選 択 肢 | | 回答率 (%) |
| ア | 関心・意欲・態度、思考・表現、気付き等の観点別評価規準の設定 | 74.5 |
| イ | 作品分析・発言分析・行動観察・自己評価・面接等の評価の方法と活用の仕方 | 58.8 |
| ウ | その子なりの意欲や気付き、活動の様子などの見取り方 | 72.5 |
| エ | 累積的な評価と活用の仕方(評価一覧表の作成や補助簿の活用など) | 31.4 |
| オ | 実践的な態度の評価 | 52.9 |
| カ | その他 | 0.0 |



生活科の評価に関しては、全体的に難しいと感じている結果が表れている。特に、「観点別評価規準の設定が難しい。」の回答が多いが、これは、単元の日標が明確に押さえられているかどうかにか大きくかわる。「その子なりの意欲や気付き、活動の様子などの見取り方が難しい。」の回答も多いが、内面的なもの見取り方なので予想された結果であり、今後の大きな研究課題である。